

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	福本 幸之
論文題目	『ダンシアッド』における風刺の研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は十八世紀前半のイギリスを代表する詩人アレグザンダー・ポウプの『ダンシアッド』の風刺を俎上に載せ、その背景、対象、手法について分析した総合研究である。</p> <p>まず序章では、この作品が執筆されるに至った経緯、及び研究資料として活用可能なテキストの出版史、さらに研究史について解説されている。「経緯」については、論文本体での議論の導入として現在この詩に三巻構成と四巻構成の二種類のテキストが存在している事情について特に紙幅が割かれている。また「出版史」においては、主に五つの版が取り上げられ、それぞれの特性や問題点が解説されている。また「研究史」では『ダンシアッド』のみを専ら扱った四点の研究書が取り上げられ、それぞれの論旨が紹介された上で、その評価、問題点が指摘されている。これらの議論を踏まえ「本論文の課題と意義」が述べられている。そこでは第1章から第3章までの議論のおおまかな流れが予告され、これまでの研究で論じられてこなかった諸点について、本論文のどこでどのように扱われるかが述べられている。</p> <p>第1章「ポウプは「なぜ」風刺するのか」では、『ダンシアッド』における風刺の背景が扱われ、まずこの作品で槍玉に挙げられている三文文士が十八世紀前半に前景化してきた要因として、定期刊行物の出現とそれと並行する会話文化の隆盛に光が当てられている。定期刊行物においてはまず読者にとって分かり易いことが優先され平易な文体が用いられたこと、さらに短い周期で原稿の締め切りがやって来たことが『ダンシアッド』における三文文士の有り様と関連づけられている。そしてそのような分かり易い文体と軌を一にする会話文化の隆盛も、『ダンシアッド』における三文文士風刺の根底にあることが跡づけられる。またポウプ自身の書簡集出版をめぐる奸計と、彼自身が『イリアス』の英訳に付した注釈とを手がかりとし、自らが揶揄している三文文士の所業に彼自身も無縁ではいられなかった点が論じられる。</p> <p>第2章「ポウプは「何を」風刺するのか」では、風刺の対象が論じられ、従来見逃されてきたこの詩の風刺対象として、(1) 旧態依然として自己改革機能を失ったかに見える十八世紀イギリス社会、(2) 物理的存在としての書物、(3) フランス料理とイタリア・オペラ、(4) 叙事詩が有するはずの教化啓蒙の機能、の四つが挙げられている。まず(1)については、第4巻に見られるものであり、この巻で看取される眠気・倦怠のイメージこそ、実は同時代の旧態依然たる空気を告発するメタファーに他ならないことが論じられている。また(2)については、人は生→死→生を繰り返すという冥界のメタファーとも呼ぶべきサイクルを下敷きにした造本過程や、上流社会で当時流行していた装飾本に対する風刺が『ダンシアッド』に読み取られることが述べられている。</p>			

(3)については、フランス料理とイタリア・オペラ両者に対する風刺の背景に、共通した図式が存在している点、及び政治的な文脈が影を落としている点が検証されている。最後の(4)については、まず往時のギリシアにおいて叙事詩が道徳の教科書のような役割を担っていた事実が指摘される。その上で、ポープが『オデュッセイア』の英訳に付した注や『髪の略奪』をめぐるテキストにおいて、如何に叙事詩についての約束事が全うされたり、または裏切られたりしているかが確認されている。一方、叙事詩のパロディーと見なされている『ダンシアッド』においては、そもそも読者が教訓を引き出せるような **action** を主人公が為し遂げていないこと、その点で『ダンシアッド』は叙事詩のパロディーではなく、叙事詩に対するアンティテーゼと称すべき作品であることが論じられている。

第3章「ポープは「どのように」風刺するのか」では、風刺の手法について論が進められている。まずポープの個人風刺の背景について、ある悪弊を矯める際に、個人を名指ししない漠然とした風刺は無力であるとする、彼の風刺哲学が確認される。その上でその哲学がどのように実践されているかが、彼のジョン・ダンの模倣詩を例に取り上げ検証されている。続いてそうした個人風刺が孕む危険性を意識した上での、彼の政治的中立性について論じられている。『ダンシアッド』を非政治的、非党派的に読むことで、新たな解釈の可能性が示唆されている。またこの作品の第1巻～3巻と第4巻とでは風刺の対象が変わっているが、その時期について1730年を分水嶺とし、この年を挟んでポープの風刺手法に変化が見られること、すなわちモック・ヒロイックの技法を誇示する努力が放棄され、内容を直截に伝えようとする方向に舵が切られたことが跡づけられている。章の後半では、まずポープが韻文で書くことの効用を強く意識していたことが検証されている。次にイタリア・オペラに対する風刺に違った角度から再び光が当てられる。つまりポープにとって音楽と詩は決して別種の芸術ではなく、一種の **continuum** (連続体) を成すものであり、「音と意味は互いに響き合うものでなければならない」という創作哲学を奉じるポープにとって、歌詞の意味が理解されないイタリア・オペラの流行は決して黙過できる現象ではなかったことが論じられる。最後にポープが「自然に倣え (**follow nature**)」という時、その **nature** という語は、語源であるラテン語の **natura** が持っている意味というよりも、「動植物を含めた文字通りの自然」という意味で用いられていることが検証されている。そして「自然に倣え」という言葉には文字通りの自然を直接に観察することを奨励したナチュラル・ヒストリー的視点が活かされていることが論じられる。

終章は本論文全体の「結論」であり、上述の三つの章で分析された考察が纏めて示されている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文「『ダンシアッド』における風刺の研究」は、十八世紀前半のイギリスを代表する詩人アレグザンダー・ポウプの風刺詩『ダンシアッド』を分析・考究したものである。イギリス文学史における十七世紀後半から十八世紀前半は「新古典主義の時代」とも呼ばれるが、この時代はエリザベス朝時代とロマン派の時代という二つの大きな山に挟まれ、これまで研究者によってあまり注目されて来なかった。十九世紀の代表的学者批評家は、この時代を「散文と理性の時代」と呼び、ポウプの詩の卓越性を認めようとはしなかった。

このような評価は二十世紀前半になっても影響を持ち続けた。『ダンシアッド』は詩人ポウプの代表的な風刺詩であるにも拘わらず、この作品を論じた专著は殆どなく、英米で僅か数冊を数えるに過ぎない。このことは、これまでいかに『ダンシアッド』の研究が、ひいてはポウプ研究が低調であったかを示すものであろう。申請者はこのような研究状況を改善すべく、明確な問題意識と精緻な分析手法を用いて『ダンシアッド』の詩的世界の考究に取り組んでいる。『ダンシアッド』を研究対象とした論考としては、近年稀な業績であり、この点は評価すべき第一の点である。

本論文の評価すべき第二の点は、方法論的に明確な意識に基づいているということである。申請者は、分析の基本的な視座として、三つの柱を設定している。つまり、第一に「ポウプは「なぜ」風刺するのか」、第二に「ポウプは「何を」風刺するのか」、第三に「ポウプは「どのように」風刺するのか」という問いを立てている。このような方法論的な意識の下に論究は行われ、数々の注目すべき見解が示されている。

例えば「ポウプは「なぜ」風刺するのか」の章では、ポウプが『ダンシアッド』を執筆した経緯と背景が明らかにされる。『ダンシアッド』においては、グラップ・ストリートを中心に居住していた三文文士が手厳しい筆致で風刺されるが、その根底には、十八世紀初頭に盛んとなる定期刊行物の発行と、それに並行する、コーヒー・ハウスに代表される会話文化の隆盛があることが指摘されている。またポウプは三文文士の「書きたがり病 (scribbling itch)」の結実としての書物の嵩や重たさを風刺している一方で、実はポウプ自身もこのような非難から逃れられない行為を行っていることが明らかにされている。これらはこれまでになされていない指摘であり、卓見といえる。

また「ポウプは「何を」風刺するのか」の章では、『ダンシアッド』の風刺対象が論じられる。『ダンシアッド』第4巻には眠りと倦怠のイメージが横溢しているが、このイメージこそは、イギリスの十八世紀前半に各方面にわたって見られた、自浄作用を失った旧態依然たる風潮とそこから生じた弊害を表すメタファーとなっていると指摘しているが、このような風刺の解説は堅実で独創的である。

「ポウプは「どのように」風刺するのか」の章では、ポウプの風刺の戦略が考察されている。例えば、トーリーとホイッグの政治対立の時代に、ポウプが如何に政治的中立を維持したかが論じられるが、彼の一眼矛盾を孕む政治的中立の極めて複雑な有り様が、精緻に分析されている。そして『ダンシアッド』が過度に政治的文脈の中で解釈されることはポウプの本意ではなかったと論じているが、この見解は興味深く、今後のポウプ研究に大きな示唆を与えるものである。

本論文では、このような三つの視座の下に明快に作品分析が行われ、多くの卓見が提示されている。結果として作品としての『ダンシアッド』が多面的に考察され、その全貌が解明されている。

評価すべき第三の点は、これまで『ダンシアッド』との関連が注目されてこなかった作品にも周到な目くばりがされていることである。周辺の作品をも考察の対象とし、『ダンシアッド』を広く新しい文脈の中で再考し、『ダンシアッド』創作における関連作品の意義を鋭く解明していることは高く評価できる。例えば、ポウプは『髪略奪を読み解く鍵』を偽名の下に執筆したが、この作品の冒頭に掲げられた詩がポウプが読者にしかけた罠であることを論証し、このような操作がポウプの風刺哲学の中核にあると論じている。このようにこれまで関連性が認められてこなかった周辺の作品に着目し、それらの分析を通してポウプの創作の実態と意義を解き明かしている。この点は申請者の広く深い学識によって初めて可能になったことであり、とりわけ評価できる点である。『ダンシアッド』は再版される毎に模倣作や海賊版や解説書などの多くの関連作品を生み出してきたが、これらの関連作品と『ダンシアッド』との関係に注目し、両者の有り様を精緻に分析する手法は、極めて有意義であるがこれまであまり試みられておらず、今後の研究に大きな示唆を与えるものと予想される。

本論文は上記のような明確な問題意識と精緻な分析手法によって書かれており、『ダンシアッド』における風刺の有り様を、殆どあらゆる観点から考究したものと見える。その論述は先行研究を十分に精査した上でなされており、論述の方法は極めて堅実なものである。広い学識と綿密で飽くなき考察に基づく論究は『ダンシアッド』研究に多くの新しい知見をもたらしたといえる。従来の研究を大きく進展させるものであることは疑いようが無く、ここで示された論点は今後『ダンシアッド』研究者にとって指標となるものと評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年1月30日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降